



Title	「認知症を考える」フォーラムの開会挨拶
Author(s)	関, 淳一
Citation	目で見るWHO. 2018, 65, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

●日本 WHO 協会フォーラム「認知症を考える」開催報告

世界では 4,700 万人の認知症患者が推測され、認知症の人が安心して暮らせる地域社会を創るためには、認知症に対する理解を深め、地域の人々の連携が大切です。

平成 29 年 12 月 6 日に大阪歴史博物館においては、大阪国際がんセンター総長の松浦成昭氏の司会により、フォーラム「認知症を考える」を開催致しました。



質問に答えられる池田先生（左端）と柏木先生と司会の松浦先生



開会の挨拶をする関理事長

「認知症を考える」フォーラムの開会挨拶

日本WHO協会理事長 関 淳一

本日はお忙しい中、私たちのフォーラムにご参加いただき、ありがとうございます。本日のフォーラムのタイトルは「認知症を考える」です。大阪大学精神医学教室の池田学先生、浅香山病院で精神保健福祉士をされている柏木一恵先生を講師としてお招きし、講演していただくことになりました。

近年、認知症について連日メディアで取り上げられるようになりました。以前は痴呆とか痴呆症、高齢者であれば老人性痴呆とか言うておりましたが、特徴的な症状は物忘れとか徘徊ということで記事になっております。今は痴呆症と言うよりは認知症が正式な用語になっていて、後ほどのお話にも出てくると思いますが、これはよいことだと思います。痴呆症というと老人のバカが歩いているような響きがありましたが、認知症はそうではないわけです。日本はすでに超高齢社会にあり、高齢者の数が非常に増えて 4 人に 1 人が 65 歳以上。ある調査によると 60 歳を過ぎると、ほとんどの人は物忘れが多くなります。私自身もそうで、特に固有名詞が出てこないと言う様なことはしばしば経験します。そのたびに認知症が始まったのかとを感じる人もおられるようですが、最近の精神医学の分野の進歩は非常に著しいものがあり、年齢に伴う物忘れは全く避けることができない、誰にも起こってくる通常の現象のようです。

また、認知症にも様々な症状を示すいろんな病態があるということです。今日高齢化の進行に伴い認知症問題は、世界的な課題となっています。昨日に WHO 本部から出たファクトシートによると、認知症は認知症の患者自身だけでなく、介護者、家族、そして大きくは社会全体にとって身体的あるいは心理的、経済的な影響を及ぼしているとしております。また、WHO の研究機関である WHO 神戸センターでも昨年から認知症を取り上げて神戸大学との共同研究で「認知症の早期発見、早期介入」をテーマに、神戸モデルをつくらうという研究をスタートしています。本日は長い間にわたり認知症について研究をされ、今もなお現場で認知症に関連する仕事をされているお二人の先生のお話を聞く機会を得ることができました。私たちも認知症について改めて考える機会にしたいと思います。ぜひ最後までご清聴いただきたいと願っております。

